湾流集

海程叢書五十

小田 保句集

湾流集

海程新社

著者略歴 小田 保（おだたもつ）
大正10年(1921年)広島県沼隈郡本郷村（現福山市本郷町）に生れる。昭和16年12月第1回繰上げ卒業、北千島幌莚島で終戦。ナホトカ、ウラジオストック等を転々。昭和23年10月帰還。向島柑橘試験場長・山下淳に出会い俳句を始める。淳の招きで来尾した金子兜太に会う。32年より37年「風」同人。同年「海程」創刊に参加、海程同人。尾道市在住。句集「尾道抄」（昭和47年）小田保句集（昭和54年）第3回海程賞受賞。現代俳句協会会員。

句集　湾流集
昭和57年1月1日発行
著者　小田　保
〒722　尾道市防地町7—24
発行所　海程新社
〒369—13　埼玉県秩父郡長瀞町本野上
根岸　慶養寺　大石雄介方
印刷所　共栄印刷株式会社
〒515—02　松阪市櫛田町656
製本所　株式会社修明社製本所
〒602　京都市上京区猪熊通下立売南入
定価　2500円

帰郷の人

金子兜太

小田保と付き合って、もう三十年ちかい。長く付き合っているせいか、小田のことはすべてが当りまえのように感じられていて、かれのことをなにか書こうとおもっても、特段に浮んでくることがないのである。それでいてひどく懐しい気分から離れられない。懐しいという名のなにかの塊りのように、小田保の姿が、瀬戸内海は尾道の海上にしろじろと存在している。

ぼんやりと、その姿を追っている。すると、それはぐでんぐでんと酔っぱらって、私に近づいてくるではないか。娘たちがみんな結婚して孫ができた。女房が病気をした。城間功順が死んでしまった。会社を退職する年齢になっちまった。——近づきながら、かれはそう呟き、ときに怒鳴るがごとく大声ともなる。酔ってるな、酔ってるな。私はニヤニヤしながら、近来肉厚になった小田のガニ股状の歩きかたを見ている。

そうだ、小田は酒好きで、しかも酒に強い。そして、酔ったときがいちばん小田保らしくもある。私はそうおもい当るのである。富山は立山山麓での俳句勉強会と称する会合でも、小田は酔っていた。夜の句会では、席の真ン中に仰向けにひっくりかえって、ぐうぐう眠ってしまったものだ。しかし誰もそれを気にする者はなく、まるで花を一杯に添えた大氷塊を真ン中に置いた酒宴のように、小田の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

軀を寝かせたまま、それを囲んで、句会は和やかにおこなわれたのである。

小田の本拠である尾道に私たちがいったときも、かれは酔っていた。自分が指導する句会の人たちをおおぜい集めて、よせばよいのに私に挨拶をしたのだが、すでに酔っていたので、ときに大声となり、ときにまったく低声となって、挨拶の内容はほとんど聞きとれなかった。しかし、並みいる人たちは、かぎりなく笑いに笑って、以後の会はまことに楽しく進行してしまったのである。私の横の人が、「人徳ですな」といった。私は、「いや、酔徳。酔い得(とく)というやつですかな」と答えて、また笑った。その夜の水揚げしたばかりのシャコの味とともに、いまおもいだす。

酔うと電話をかけてくる。大阪にいた頃からそうなったようにおもうが、そんなことはどうでもよい。尾道に帰ってからは、間歇的

にかかってきて、かならずといってよいほどに、電話口の声は酔っているから、私は、一杯はいると電話をする癖があるのだろうとおもっている。ときに私を叱り、私の細君まで呼びだして叱る。ときには自分の身辺の様子も伝えてくれる。息女二人の結婚のときや、夫人入院のときなどは、いかにも悲しげに口ごもっていた。しかし、孫が無事に産れ、夫人が元気になると、かれの口調は打って変って滑らかになった。親友城間功順の死のときは吐きすてるような口調だった。我慢ならぬ、という印象だった。

酒に酔っている小田保――これは書きだせば切りのないことだから止める。ただし、このことだけは書いておきたいと思うのは、酔っているときの小田保には、殊に顕著に、昔時の平家の公達であり武者でもあった者たちの面影を覚える、ということである。平重盛か知盛か、さては宗盛か、などと詮議するのももどかしいくらいに、

ああ、平家の公達よ武者よ、とおもってしまう。離れれば離れるほど、その面影は鮮やかになって、いまも私は、尾道の湾流に立つ小田保の酔い姿を、平家の武者もかくありしならんとおもい定めて見ているのである。

小田保はぜったいに東国の武者ではない。平家を名乗る武者は東国にも多かったが、小田はどこまでも西国の平家であり、しかも嫡流の公達の面影をただよわせている。皮膚白く、潤沢。眼の細目がちに、鼻は不出来ながらほどほどに蹲り、口やや甘え気味にさわやか。それらはどことなく品を感じさせて、酔って怒鳴ろうと喚こうと、ぐでぐでと歩こうと、仰向けにひっくりかえろうと、すこしも下賤の印象を人に与えないから不思議である。私は小田保を見ていて、人間の品位ということをおもうことが多い。得な奴だとおもうのである。

品(ひん)は、その体からにじむ優しさともかかわりがあろうか。しかも、酔って粗暴の態を呈するほどに、優しさは一種悲壮の感を加えて、ますます西の内海に漂う平家の公達武者を髣髴させるのである。優しいこころ根が悲壮の感をあらわすとき、かれの情熱は燃えているのだ。

この情熱――酔わないときは情熱の波打ちを抑制しているがごとく平淡だが、酔うと、情熱は有り態に波頭を見せる。いや、息女嫁し、夫妻は祖父母となり、長年勤めた会社を退く時期となって、かれの情熱の体質は、酔わないときでも表にあらわれるようになってきた。沖縄や黒部峡谷などの旅吟も、惜しみない情熱の昂ぶりのなかにあったし、城間功順の故郷沖縄での友を偲び悼む句の悲調は忘れ難い。いやいや、すでに大阪にいた頃の、白鳥陵や二上山にこころをかよわせていたときの作にも、優しく静もるこころと、昂ぶる情

熱との交響があった。

小田は句集の題を「帰郷」にしたかったと書き、周囲の者もそれを奨めたと記している。宜なる哉。しばし東国から京阪の地をさまよったあと、瀬戸内海の由緒の地・尾道に帰って、その地で、生涯に一つの区切りをつける時期をも迎えている小田保は、水を得た魚のごとし、なのだ。さぞかし「帰郷」のおもい深からんとおもい、「湾流集」ではそらぞらしいともおもう。この句集、「帰郷」一巻として読みたい。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co

目　次

帰郷の人　金子兜太　1

1部

I　沖縄　13
II　風化の夏　41
III　檣灯　51
IV　下北半島　59
V　小突堤　67
VI　志摩・伊良湖　77
VII　巣別れ　87
VIII　東鄙歌　99
IX　生誕　111
X　祭礼　119
XI　単線・旅情　131
XII　冬虹　143
XIII　黒部峡谷　153

2部

I　高槻・淀川　165
II　孤礁　177
III　羽曳野　185
IV　淀屋橋界隈　195
V　帰郷・尾道　201
VI　斜陽　211
VII　冬凪　219

あとがき　226

湾流集一部

I　沖　　縄

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.co